別紙

平成２５年度県立大学地域貢献研究の研究成果について（ 完了報告・中間報告 ）

研究テーマ	連携・協働による地区景観まちづくり支援の実践的展開 ———永平寺町「永平寺川・本山エリア」を事例にして——
研究期間	平成24～25年度
主たる研究者	【学部・学科】 看護福祉学部 社会福祉学科　　【職・氏名】教授　北條　蓮英

○研究の位置づけ——連携・協働による実践的展開

本研究は、いわゆる「研究のための研究」でない。実践的な目標達成に挑戦するプロジェクトととらえている。このため研究推進にあたり県立大学と自治体（永平寺町）とが連携協定を締結した。とはいえ２年間という時間の制約のなかで、目標達成に近づけるのは、実は容易なことではない。正に凌ぎをけずる思いの連続であった。というのは、当該研究者は、同時にプランナーあるいはファシリテーターもしくはコーディネーターとしての実践的視点に立たねばならない。その思いと現実とのギャップが生じるのが世の常で、期待とおりにすすむとは限らない。しかし、地域貢献研究として取り組む以上、目標にむけて着実に駒をすすめる、深い読みと強靭な精神力が欠かせない。ここに理論的側面と実務的側面の両輪で攻める必要性があり、連携・協働の総合力の駆使により、種々の困難を突破することができた、と総括できる。

○研究目的

改めて本研究の目的は、「永平寺川・本山エリア」（図－１）を対象に、連携・協働による地区景観まちづくり支援の実践的展開にある、研究のアウトプット目標は、（仮称）景観まちづくり協議会の立ちあげを仮設としている。

○研究のモデル性

当該エリアは「永平寺町景観計画（平成20年策定）」で示されている６エリアの一つであるが、本研究で優先してとりあげた理由は次のとおり。当エリアには、大本山永平寺という突出した歴史文化資源があるが、これだけでなく多様な景観資源がみられる。永平寺川、大仏寺山、城山等の自然資源を背景に豊かな農用地などの田園景観が暮らしの景観として大きく存在感を示し、エリア全体の、個性的な生活景をつくっている。また、永平寺線跡地という空間資源や大本山永平寺門前町の「禅の里」構想、えちぜん鉄道永平寺口駅周辺整備等の着実な動きがみられる。なお、永平寺町景観審議会は、景観条例を前進させるべくモデル的な研究の実施により、将来的には他の地区に応用していく先導的意義があるとされた。

○研究方法

本研究の方法的特長は、ワークショップの援用にある。そもそもワークショップは、参加、相互作用、体験をキーワードに、意向集約の有用な方法とされるが、今回は、さらに学の立場から学びにつながる適切な情報を提供し、住民の「まちあるき」「観察体験」によるフィールドワークと重ねることで、グループワークによる相互啓発の効果を期待することとした。

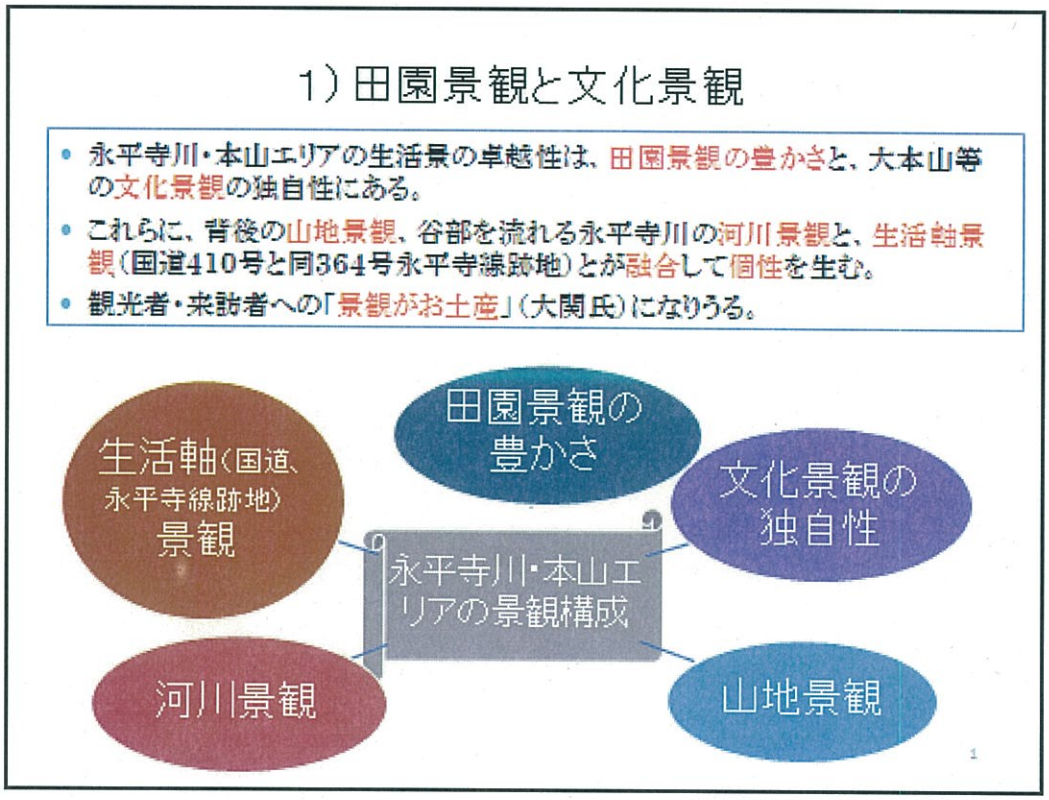
この期待に対し参加者の評価は高い満足度が得られた。初心の不安がある中、回を重ねることを通じていわゆる壁新聞（ポスター）作成とプレゼンが習熟していった。各回30～50名程度の参加者が得られた。２年目はやや減少した。課題の第１は、開催日設定の問題。曜日は土・日にせざるを得ないが、地元集落の催事、兼業農家の協働作業、行政的なイベント等の日程をにらみながら、その隙間をぬいて設定することは至難であった。

第２は、ワークショップという未経験な形式への参加への逡巡も否定できない。参加者は住民のほか、町外関係者、一般行政職員の参加が得られた。学生の参加についてはケーフルテレビの広報アナウンス面における活躍があったが、ワークショップそのものの参加には、教育プログラ

ムとの関係で多忙な学生の参加は容易ではない。
　一方、ワークショップを学ぶ職員研修の意義があることから参加を呼びかけ、一定の参加があったが、この経験知は今後の行政展開にあたり有益と推察できる。
　ワークショップは２年間で都合８回開催し、各回のワークショップの結果をかわらばん（Ａ４版４頁原則）に編集発行し、住民にフィードバックすることが最大の目的だった。しかし、時間的、準備作業的にはぎりぎりの限界を走った。
〇アンケート結果の概要（中間的集計）
ア）配付エリア内の全戸対象842世帯。回収304票、回収率36.1%（3月4日現在）。中間的集計（サンプル270票）結果の概要をみる。回答者の年齢構成は各年代による偏りはみられない。来住時期は「先祖から相続」４割、「昭和40年代まで」２割、「昭和50年～平成６年」、「平成７年～平成16年」に各15%がある。つまり来住期間10～20年といった比較的短い世帯もみられる。
〇ワークショップの企画、開催、成果の広報等一連のフィードバックの成果
　アンケート結果によると、ワークショップ参加者はエリア住民の７%、「都合があわず不参加」者も９%みられた。つまり、潜在的参加希望者は16%と推定され、決して小さい数値ではない。広報紙全戸配付の日程にあわせて開催案内チラシを配付したが、これをみたとするのは約半数ある一方、開催を知らないとする者も３割存在。これは広報紙の束に埋没した可能性がある。
　「景観まちづくりかわらばん」は８号発行したが、通読率は半分になる。ワークショップの結果については、町民は、一定の関心をもって通読していただいたと評価できる。
〇生活景に対する潜在意識
ｉ）景観への潜在意識（景観の価値観）
「身近な環境・景観の愛着心（問3）」は、80%が有する。景観の感動的体験は、思い出せない場合をふくめ、84%がある。一方で、「気になる景観」では、43%が感じているとする。つまり、景観への愛着心は強く、感動体験はかなり多くの人がもっている。その一方で、「景観に気になる」点、つまり見逃すことはできない景観的側面に、４割も指摘していることに留意したい。
ⅱ）「景観は皆のもの（公共財）」（問10）という認識状況は、77%が有する。「農業が田園景観をつくる上で大切な要素である」との認識は、84%と高く、また「農業の振興・保全には一般消費者の応援が必要」の共感性については、73%がもっている。景観づくりは、「住民、事業者、行政との協働」の営みであることについては、85%が共感している。以上から、景観の愛着、田園景観の保全、農業重視の姿勢が明確であることがわかった。
ところで、永平寺町景観条例の認知状況は、残念ながら、31%と低い結果が判明した。景観まちづくりの展開のなかで、条例の活用等を広報していくことが課題といえる。
ⅲ）景観まちづくりの顕在意識
「景観まちづくり協議会の必要性」（問15）については、72%の方が必要とみている。「景観まちづくり目標像（案）の共感性」（問16）については、第８回ワークショップ、中間的提案として提起した当エリアの目標（像）「川に親しみ、田園・文化風土を育む景観まちづくり」については、77%の共感が得られた。
次に「永平寺川の安全性確保と自然回復の両立確保」（問17）について、「川の安全性の確保と自然の回復の両立を図る整備」について86%の支持が集まった。顕在意識が８割前後と高い。
ⅳ）定住意向、農業将来意向
「定住意向（問26）は、「当分住み続ける」、「ずっと住み続ける」の計は87%と高い。
また、農業の将来については、無回答が67%を占め、現在のＴＰＰの行方が色濃く不安要素となっているといえる。「やめたい」11%、「継続」16%で、無回答を除くと、継続指向が高い。
〇結論
本研究の目標仮設とした「（仮称）景観まちづくり協議会」について７割以上の支持が得られた。景観まちづくり協議会の提案は基本的にうけいれられたと結論づけられる。

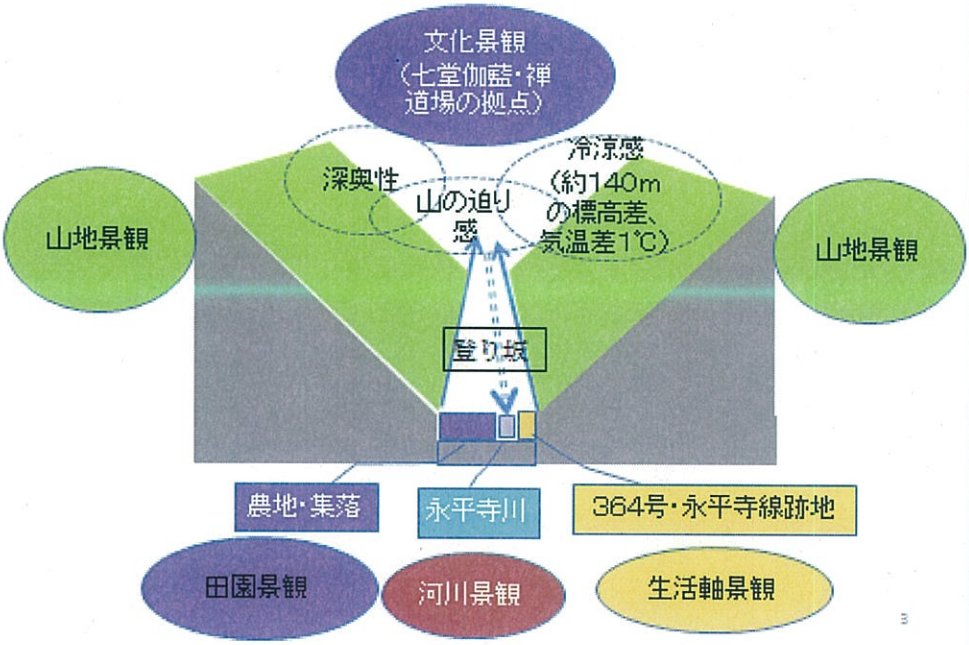
※ホームページ掲載用として使用するため、Ａ４　２枚程度で簡潔にまとめてください。
　参考資料（図、写真等）があれば添付してください。

実績報告書添付図


1）田園景観と文化景観
永平寺川・本山エリアの生活景の卓越性は、田園景観の豊かさと、大本山等の文化景観の独自性にある。
これらに、背後の山地景観、谷部を流れる永平寺川の河川景観と、生活軸景観（国道410号と同364号永平寺線跡地）とが融合して個性を生む。
観光者・来訪者への「景観がお土産」（大関氏）になりうる。
生活軸（国道、永平寺線跡地）景観
田園景観の豊かさ
文化景観の独自性
永平寺川・本山エリアの景観構成
河川景観
山地景観
1

永平寺川・本山エリアの植生図
ブナ林（自然林）
ケヤキ林（自然林）
落葉広葉樹林（二次林）
アカマツ林
スギ植林
水田
人工草地
市街地
環境省（2004）を改変
2

2) 地形構造から受ける景観心理イメージ



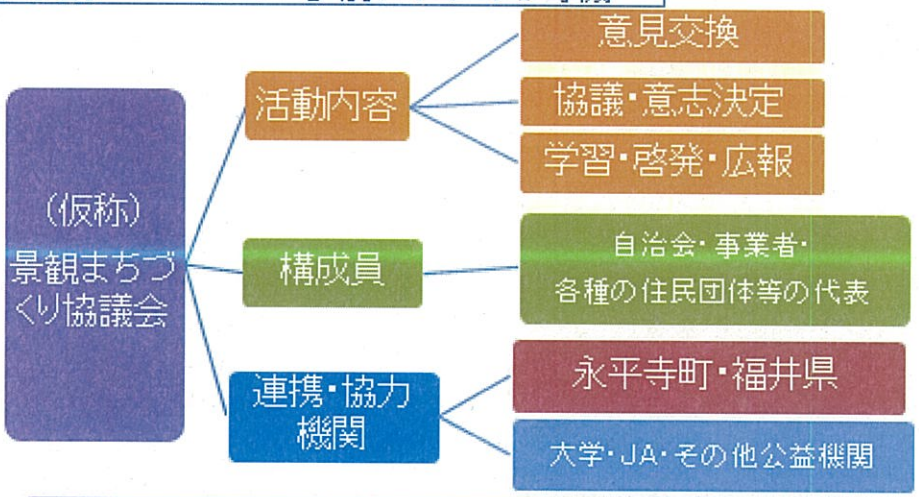
3) 永平寺川・本山エリアの景観まちづくり構想

（まちづくり目標）
川に親しみ、田園・文化風土を育む景観まちづくり

景観まちづくり
整備イメージ（案）
（左図参照）
1) 交流ひろば
2) 親水ひろば
3) 川の観察ポイント

4）景観まちづくりのすすめ方（案）

◆景観まちづくりを一歩前にすすめる時機

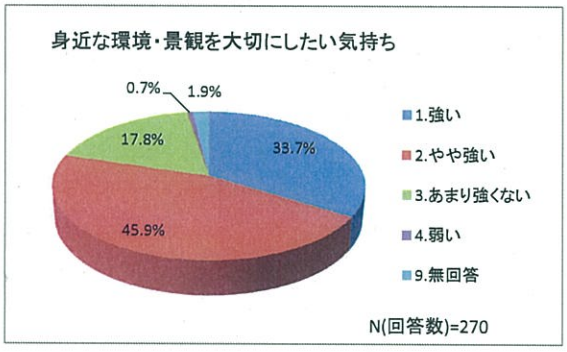


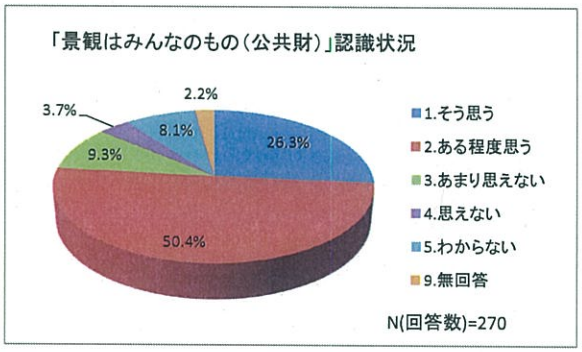
景観まちづくり・・・地域の課題を改善、個性をのばす地域づくり。
・・・景観面に焦点を当てながら。

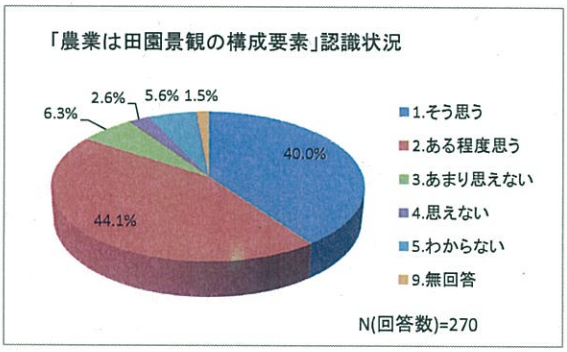
注）人口2，983人、893世帯（平成24年4月）

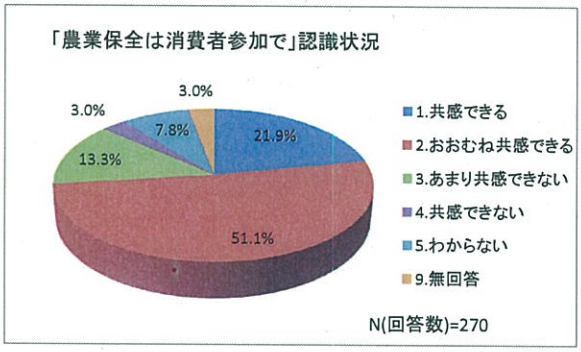
5

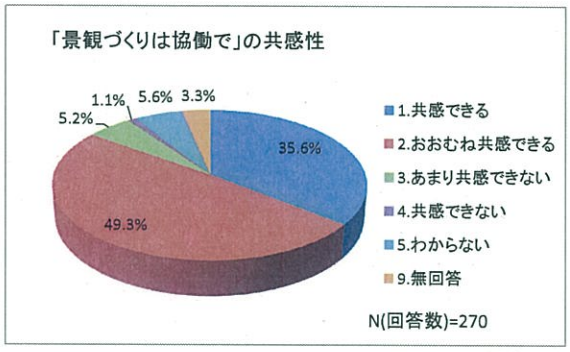
景観の見方への潜在意識（景観の価値観）

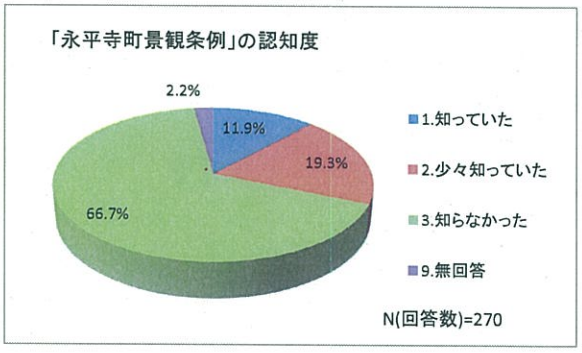
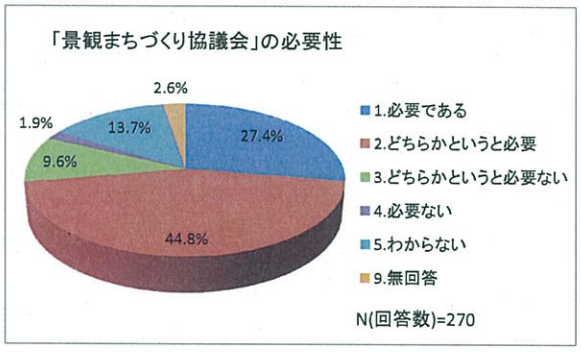
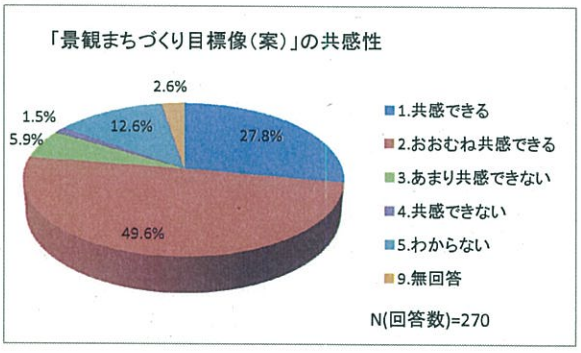
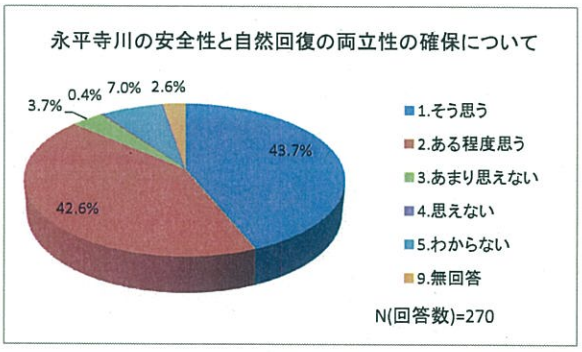












景観まちづくりの顕在意識